

# 西新町遺跡 11

— 第21次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第985集

2008

福岡市教育委員会

# 西新町遺跡 11

—第21次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第985集



遺跡略号 NSJ-21

調査番号 0643

2008

福岡市教育委員会





1. SC05 3区遺物出土状況（北西から）



2. SC05出土遺物



# 序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、本市におきましてはこれらの保護と活用に取り組んでいるところであります。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていることも事実です。本市教育委員会では開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存に努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い調査を実施した西新町遺跡第21次調査の成果を報告するものです。今回の調査では弥生時代終末期から古墳時代前期の集落跡を確認すると共に、多数の土器や石製品が出土しました。さらに弥生時代集落の下層からは縄文土器の存在も確認されました。これらは、当時の西新地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者をはじめとする多くの方々の御理解と御協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

## 例　言

1. 本書は共同住宅建設に伴い、早良区西新5丁目572-2において発掘調査を実施した西新町遺跡第21次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いた方位はすべて磁北である。
3. 本書で使用した遺構の呼称は、竪穴住居址をSC、溝状遺構をSD、土坑をSK、ピットをSP、不明遺構をSXと略号化している。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は今井隆博が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は平川敬治、今井が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は牛尾功仁子、今井が行った。
7. 本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は今井が行った。
8. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
9. 本書の執筆・編集は今井が行った。

## 本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	2
第3章 調査の記録.....	6
1. 調査の概要.....	6
2. 遺構と遺物.....	8
第4章 まとめ .....	22

## 挿図目次

第1図 西新町遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25000) .....	3
第2図 調査地点と周辺の調査区 (1/4000) .....	4
第3図 調査区位置図 (1/500) .....	5
第4図 調査区割図 (1/250) .....	6
第5図 調査区全体図 (1/120) .....	7
第6図 4区東壁土層図 (1/60) .....	8
第7図 SC05実測図 (1/60) .....	8
第8図 SC05出土遺物実測図① (1/4) .....	9
第9図 SC05出土遺物実測図② (1/4) .....	10
第10図 SC05出土遺物実測図③ (1/3) .....	11
第11図 SC14実測図 (1/60) .....	12
第12図 SC14出土遺物実測図 (1/4・1/3) .....	13
第13図 SC23実測図 (1/60) .....	14
第14図 SC23出土遺物実測図 (1/4) .....	14
第15図 SD22実測図 (1/60) .....	15
第16図 SD22出土遺物実測図 (1/4) .....	15
第17図 SK02実測図 (1/40・1/20) .....	16
第18図 SK02出土遺物実測図 (1/4) .....	16
第19図 SK12・19実測図 (1/40) .....	17
第20図 SK12出土遺物実測図 (1/4) .....	18
第21図 SK18・20・21・24・25・26実測図 (1/40) .....	19
第22図 SK19出土遺物実測図 (1/4) .....	20
第23図 SK20・21出土遺物実測図 (1/4) .....	21
第24図 その他の遺物実測図 (1/4・1/2・1/3) .....	21
第25図 純文時代遺物実測図 (1/3・2/3) .....	22

## 表目次

第1表 西新町遺跡調査一覧表 ..... 4

## 図版目次

### 巻頭図版

1. SC05 3区遺物出土状況（北西から） 2. SC05出土遺物

### 図版 1

1. 1区北東部全景（南から） 4. 3区全景（南から）  
2. 1区全景（西から） 5. 4区全景（北から）  
3. 2区全景（北から） 6. 5区全景（北から）

### 図版 2

1. SC05 1区（北から） 4. SC14 4区（北から）  
2. SC05 3区（南から） 5. SC14 4区遺物出土状況（北から）  
3. SC14 2区（北西から） 6. SC23（北から）

### 図版 3

1. SC23遺物出土状況（北から） 4. SK02遺物出土状況（北から）  
2. SD22（西から） 5. SK02完掘状況（南西から）  
3. SK02（南西から） 6. SK12（南東から）

### 図版 4

1. SK19（南から） 4. SK20（北西から）  
2. SK19遺物出土状況（東から） 5. SK21（南から）  
3. SK19完掘状況（南から） 6. 4区縄文時代遺物出土状況（北から）

### 図版 5

- 出土遺物 I

### 図版 6

- 出土遺物 II

### 図版 7

- 出土遺物 III

### 図版 8

- 出土遺物 IV

## 第1章 はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成18年2月17日、有限会社モンテベルより福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下、埋文課）に対して、福岡市早良区西新5丁目572-2における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受け埋文課では、申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である西新町遺跡に含まれていることから、平成18年3月30日に確認調査を実施した。その結果、現地表下約2.1～2.9cmで遺物包含層もしくは遺構を確認した。この結果に基づいて申請者と埋文課は協議を行い、記録保存のため発掘調査を実施することで合意した。その後委託契約を締結し、平成18年9月6日から同年12月5日まで発掘調査を実施した。整理作業と報告書の刊行は平成19年度に行った。なお、発掘調査・資料整理の経費の一部について、国庫補助金適用要項に基づき国庫補助金を適用した。

調査番号	0643	遺跡略号	NSJ-21
調査地地籍	早良区西新5丁目572-2	分布地図番号	荒江72
開発面積	568.98m <sup>2</sup>	調査実施面積	369.49m <sup>2</sup>
調査期間	2006.9.6～2006.12.5	事前審査番号	17-2-1186

### 2. 調査の組織

調査委託：有限会社モンテベル

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括：埋蔵文化財第2課 課長 力武卓治

同課調査第1係長 池崎譲二（前任） 杉山富雄（現任）

調査庶務：文化財管理課 後藤泰子（前任） 井上幸江（現任）

事前審査：埋蔵文化財第1課事前審査係 松浦一之介（前任） 繁富士寛（現任）

調査担当：埋蔵文化財第2課調査第1係 今井隆博

調査作業：浅井伸一 上野道郎 海津宏子 金子由利子 真田弘二 柴田勝子 柴田春代

須佐恵司 田中昭子 西口キミ子 原田由紀子 古庄孝子 森弘品子

整理作業：牛尾功仁子

尚、発掘作業から報告書作成に至るまで、有限会社モンテベル・大成建設株式会社をはじめ地域住民等関係各位には多大な御協力と御理解を頂きました。記して感謝する次第です。

## 第2章 遺跡の立地と環境

西新町遺跡は早良平野の東北端に位置する。早良平野は中央を室見川が北流し、これと十郎川・樋井川などの冲積作用により平野が形成されている。また室見川河口両岸には愛宕山、五塔山、龜原山などの第三紀の独立丘陵が存在する。海浜部には博多湾の左転海流により形成された弓状砂丘が存在する。この博多湾岸に広がる砂丘は箱崎砂丘と呼ばれ、箱崎、馬出、吉塚、堅粕、博多中洲、天神、荒戸、地行、西新、藤崎、姪浜と続き、福岡市の主要な都市部のほとんどを占める。砂丘全体の海岸部には元寇防堤が東西方向に伸びており、現在は生の松原、小戸、西新等の地区で調査・保存されている。これらの砂丘は繩文海進期から形成され始め、海側では中世まで砂丘の形成が続いている。

西新町遺跡が位置する砂丘は東を樋井川、西を金屑川に亘され、北側を博多湾、南側は室見川等が形成する後背湿地に挟まれた東西1400m、南北300mの細長い形状を呈する。西新町遺跡はこの砂丘上で県立修猷館高校を中心として東西800m、南北300mに広がり、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落遺跡と弥生時代の喪棺墓地からなる。集落は弥生時代中期後半に遺跡南西部からみられはじめ、古墳時代初頭には修猷館高校周辺に大規模に展開する。飯蛸壺や石錘など漁村的な遺物が出土する一方で、鉄器や朝鮮半島系土器、畿内・山陰系土器が多く出土すること、国内でも早い時期の窓の受容などから対外交流の拠点であった様子を窺える。

西新町遺跡の西側には浅い谷を挟んで藤崎遺跡が存在している。藤崎遺跡は地下鉄藤崎駅周辺に広がる遺跡で、弥生時代の喪棺墓や古墳時代の方形周溝墓、土墳墓、石棺墓などの墓地構造が多数確認されており、方形周溝墓からは舶載鏡をはじめとした貴重な遺物が出土している。

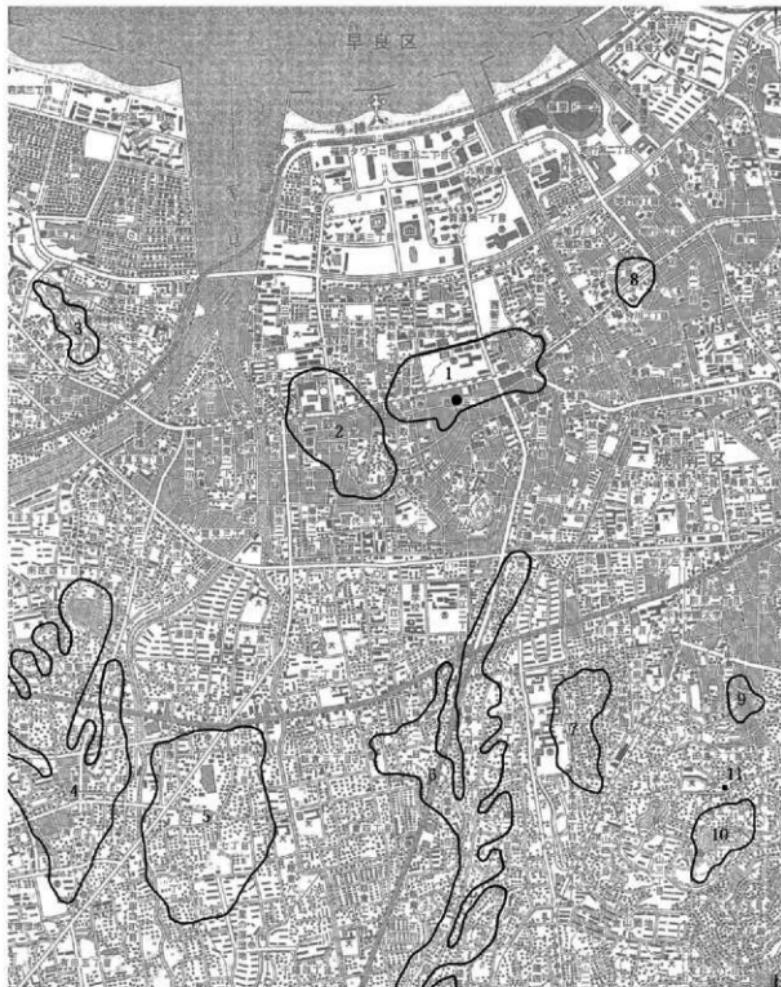
藤崎遺跡から室見川を挟んで西側に連なる砂丘上には姪浜遺跡があり、弥生時代中期から後期の喪棺墓と古墳時代前期までの集落が確認されている。出土遺物には石錘、製塙土器などの生産関係遺物、南海産の貝製未製品・貝玉、朝鮮半島系無文土器、漢式系三翼鐵などの外来資料が多く、西新町遺跡と類似した様相が窺える。

西新町遺跡ではこれまで22次にわたる発掘調査が実施されている。これまでの成果によると、弥生時代中期後半の集落は第16次地点を西限とし、第6次地点までの東西約150mの範囲に展開している。当該期の土器・漁器以外に、第8次調査ではガラス容器片・含鉄精鍊鉛治津・朝鮮半島系無文土器が、第9次調査では板状鉄斧、第16次調査では国内最古のトンボ玉など、特筆すべき遺物が多数出土している。遺構は竪穴住居址、土坑、土器溜まり等からなり、第9次地点付近が弥生中期の集落の中心地と思われる。

該期の墓群は修猷館高校グラウンドから南側の道路付近に展開し、第1・2・7・10・18次地点で確認されている。第2次調査では喪棺からゴホウラ製貝輪や銅剣切先が出土した。第10次調査では中期後半の成人棺から頭蓋骨を欠く人骨と、その直上の小形棺から頭蓋骨のみが出土するという特異な埋葬が見られた。第10次地点の南側の第18次地点でも北端で喪棺が1基確認されているが、第18次地点に隣接する第21次地点では喪棺は確認されず、喪棺墓の分布範囲がある程度判明してきた。

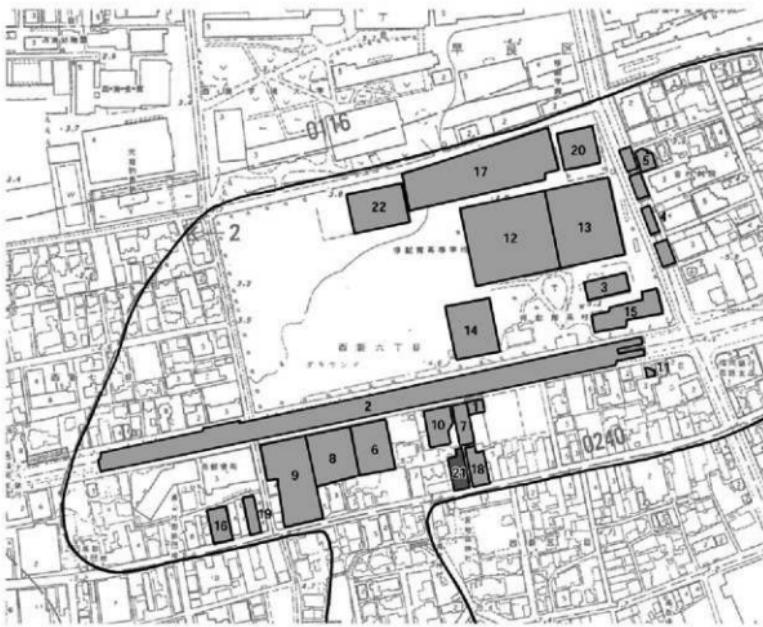
弥生時代終末期から古墳時代前期には、第8次地点を西限に第5次地点にかけて集落が確認され盛期を迎える。修猷館高校校舎改築に伴う福岡県教育委員会の一連の調査では、竈を伴う竪穴住居址が多数検出され、近畿・山陰系や朝鮮半島系土器が多数出土するなど外来系文化の流入が窺え、またガラス玉鉢型や碧玉未製品など生業関連遺物の出土なども特徴的な様相を示している。

その後は古墳時代後期の遺構がわずかに確認される程度である。第9次調査では副葬品をもつ土墳墓が、第18次では土坑が検出されている。近世以降になると高取焼窯廻の遺物が多く出土する。



- |          |           |           |          |
|----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 西新町遺跡 | 2. 藤崎遺跡   | 3. 筑前探題跡  | 4. 有田遺跡群 |
| 5. 原遺跡   | 6. 飯倉遺跡群  | 7. 茶山遺跡   | 8. 烏飼遺跡  |
| 9. 田島A遺跡 | 10. 田島B遺跡 | 11. 京ノ隈古墳 |          |

第1図 西新町遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25000)



第2図 調査地点と周辺の調査区 (1/4000)

第1表 西新町遺跡調査一覧表

調査次数	調査年度	所 在 地	調査原因	報告書
1次調査	1974年	西新5丁目地内	共同住宅	未報告
2次調査	1976年～78年	西新6丁目地内	地下鉄	市報79集(1982)
3次調査	1984年	西新6丁目1地内	校舎建設	県報72集(1989)
4次調査	1986年	西新3丁目地内	道路拡幅	市報204集(1994)
5次調査	1992年	西新3丁目606-4	病院建設	市報375集(1996)
6次調査	1994年	西新5丁目634-4	共同住宅	市報483集(1996)
7次調査	1994年	西新5丁目538-9	共同住宅	市報483集(1996)
8次調査	1994年	西新5丁目644-1・644-2	共同住宅	市報484集(1996)
9次調査	1995年	西新5丁目564外	共同住宅	市報505集(1997)
10次調査	1995年	西新5丁目641-3外	共同住宅	市報683集(2001)
11次調査	1997年	西新5丁目632-6	店舗建設	市年報Vol.12(1999)
12次調査	1998年	西新6丁目1地内	校舎改築	県報154・157集(2000・2001)
13次調査	2000年	西新6丁目1地内	校舎改築	県報168・178集(2002・2003)
14次調査	2001年	西新6丁目1地内	校舎改築	県報200集(2006)
15次調査	2002年	西新6丁目1地内	校舎改築	県報200集(2006)
16次調査	2003年	高取1丁目105～108	共同住宅	市報846集(2005)
17次調査	2003年	西新6丁目1地内	校舎改築	県報208集(2006)
18次調査	2005年	西新5丁目572外	共同住宅	市報939集(2007)
19次調査	2006年	高取1丁目111外	共同住宅	市報984集(2008)
20次調査	2006年	西新6丁目1地内	校舎改築	市報985集(2008) 本書
21次調査	2006年	西新5丁目572-2	共同住宅	市報985集(2008) 本書
22次調査	2007年	西新6丁目1地内	校舎解体	



第3図 調査区位置図(1/500)

### 第3章 調査の記録

#### 1. 調査の概要

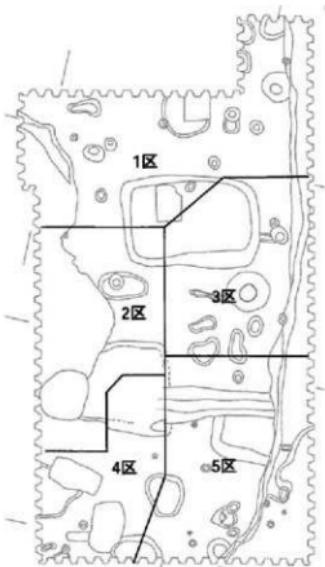
今回の調査地点は西新町遺跡の南端に位置する。周辺では北側に頭部と胸部を別々の土器に入れた人骨が出土して注目された第10次調査地点と、弥生時代中期後半の妻棺墓と終末期の集落が検出された第7次地点がある。東側は弥生時代終末期から古墳時代前期の集落と縄文時代の包含層を検出した第18次調査に接する。過去の調査成果より、西新町遺跡は南西部に弥生時代中期後半の集落が、中央付近に同時期の墓地が広がり、中央付近以東は弥生時代終末～古墳時代前期の集落が広がることが判明している。本調査地点も弥生時代終末頃の集落が検出されることを予想して調査に着手した。

調査はシートバイルで囲まれた約370m<sup>2</sup>を対象とした。廃土は場内で処理するため第18次調査と同じく3区に分けて調査する予定であったが、予想以上に土量が多く、結局5区に分割しての調査となった。そのため一つの遺構が三分割されたり、遺構の切り合い部分が調査区の境目に当たるなど、十分に遺構を把握できなかった部分がある。

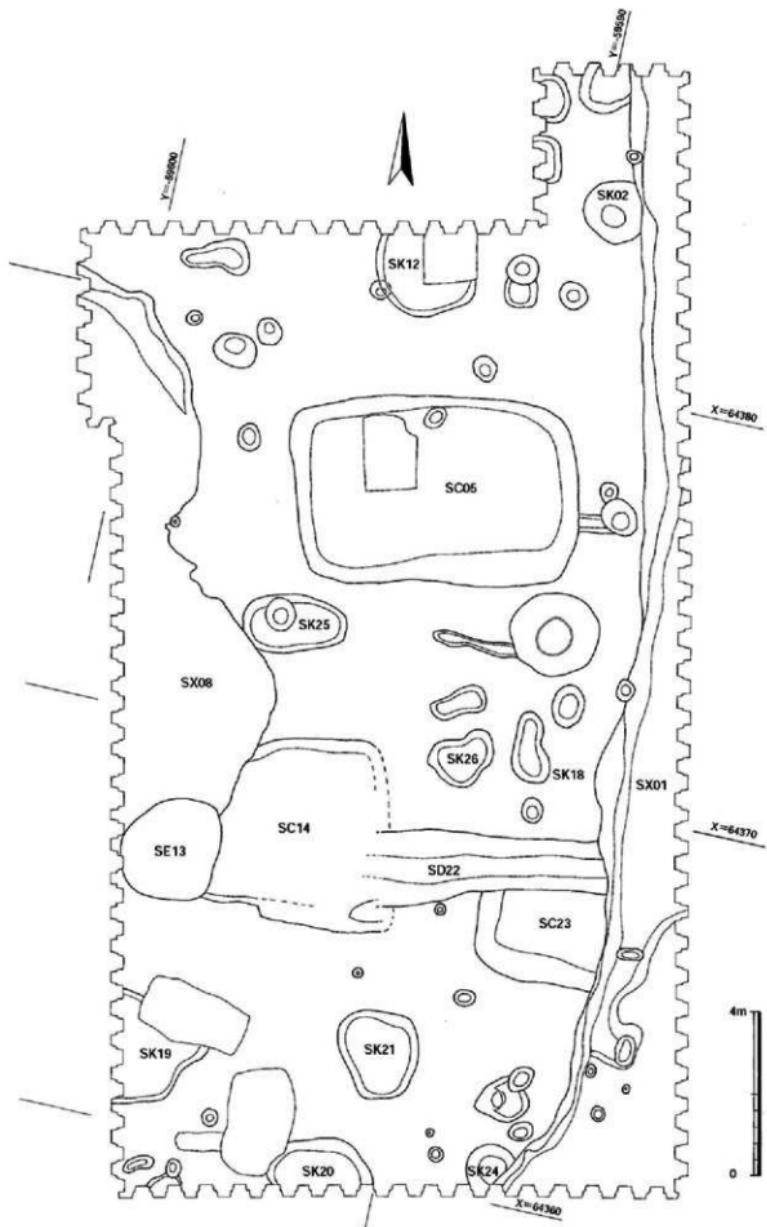
基本層序（第6図）は地表面（標高約5.6m）から-60cmまでが客土、-100cmまでが浅黄色砂、-140cmまでが暗灰黄色砂、-150cmまでが汚れた褐色砂で、以下が地山の黄白色砂となる。第19次調査では地山上層の黒褐色砂に大量に遺物が含まれていたが、本調査地点の黒褐色砂にはほとんど遺物が見られなかった。第18次調査では褐色砂と黄白色砂の2面で調査を行っており、本地点でも当初2面の調査を行ったが、第2面からは明確な遺構は検出できなかつたので1面のみの報告とする。よって、本調査地点では基本的に褐色砂を遺構面とした。ただし区によっては重機で下げ過ぎたために黄白色砂を検出面としたところもある。遺構面の標高は北側で3.5m、南側で4.2mで、南から北に下がる地形である。4区・5区では地山の黄白色砂の下から赤みがかった褐色砂が検出され、縄文土器包含層を確認した。

検出した遺構は弥生時代終末期の住居址3軒、土坑9基、古代と思われる溝、近世以降の井戸などである。遺物は当該期の土器を中心に、黒曜石製鍛や磨製石斧、縄文土器片少量が出土している。その他、近世の高取焼に関連する窯道具が少量出土している。遺物の総量はコンテナケース約30箱である。

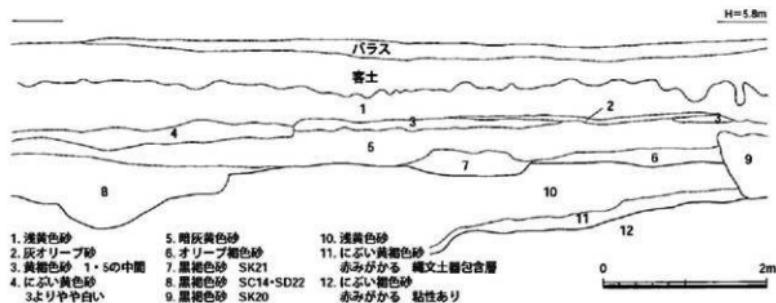
なお、「西新町遺跡9」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第939集）Fig. 3で報告された第18次地点の位置は南にややずれており、本書第3図の位置が正しい。



第4図 調査区割図 (1/250)



第5図 調査区全体図 (1/120)



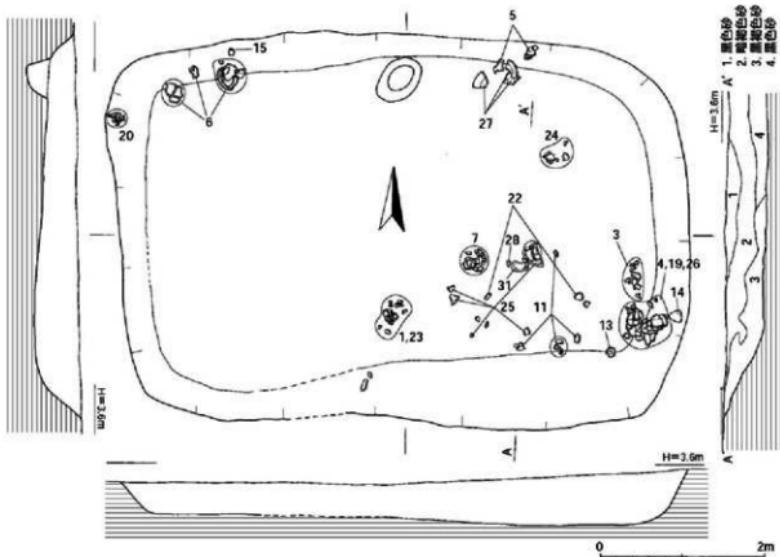
第6図 4区東壁土層図 (1/60)

## 2. 遺構と遺物

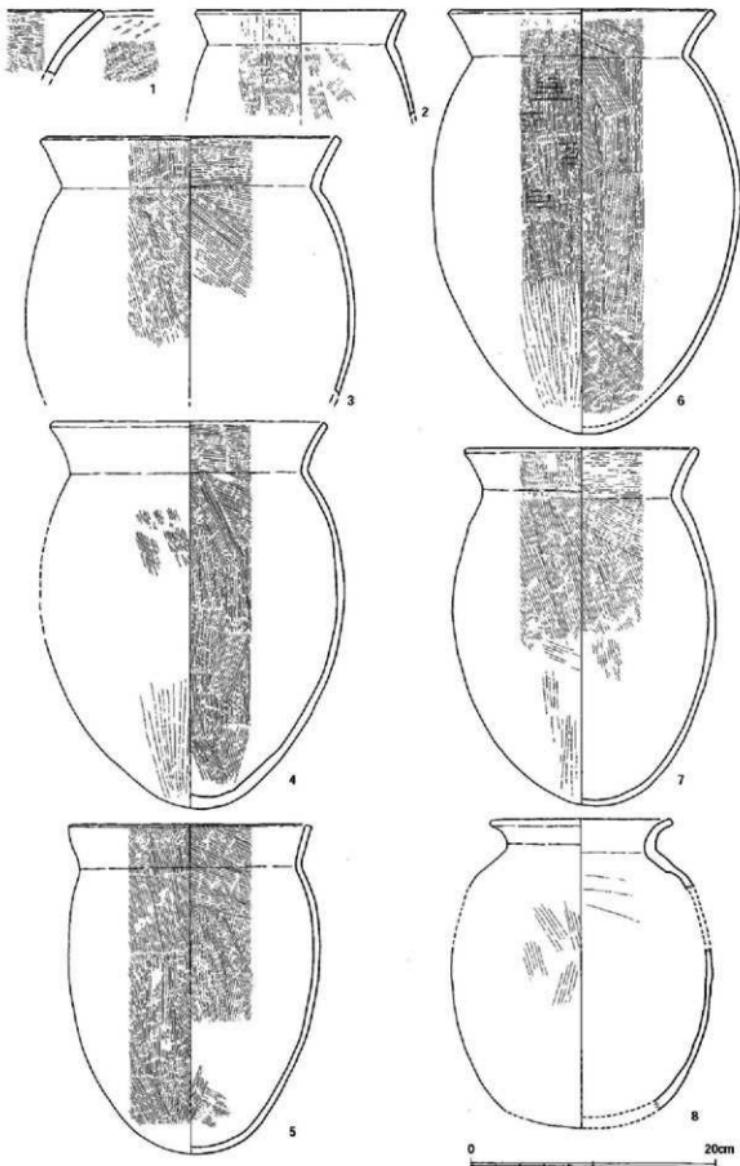
①竪穴住居址(SC)

SC05 (巻頭図版、第7図、図版2-1、2)

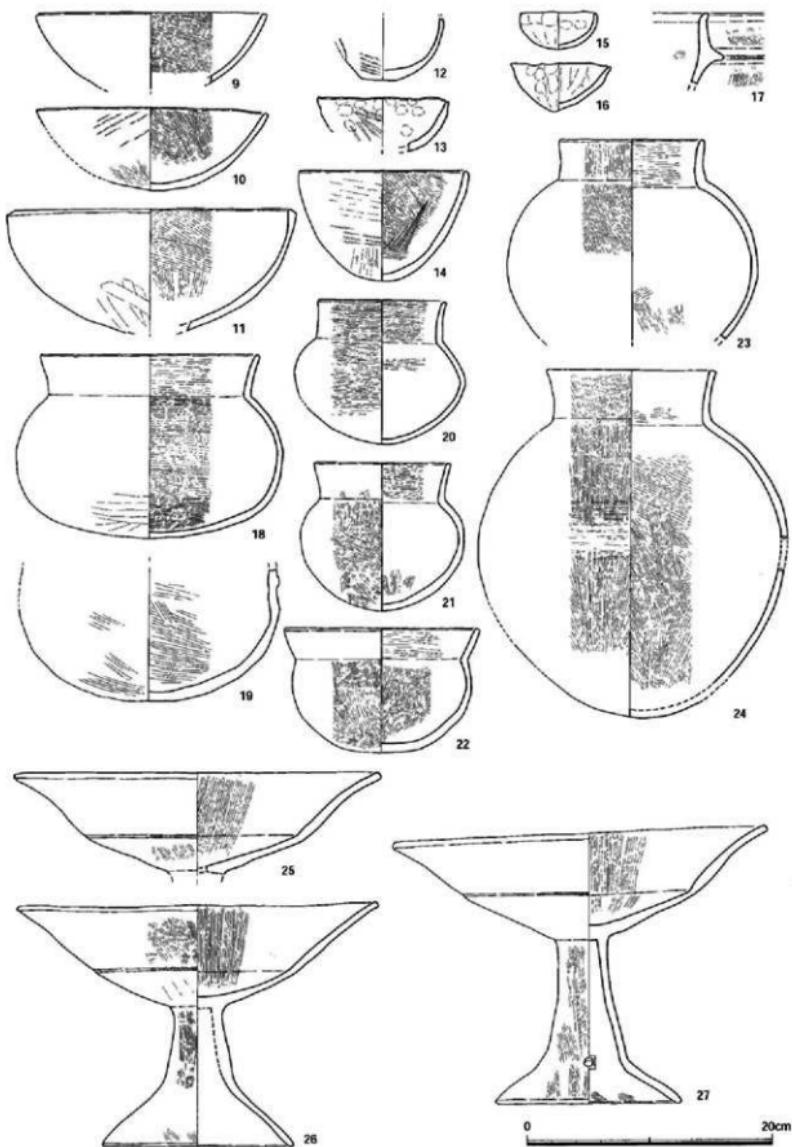
1・2・3区にまたがって検出した。平面形は東西7.1m、南北4.8mの長方形を呈し、残存壁高70cmの大型の竪穴住居址である。試掘トレンチが1区の中央付近を掘り抜いている。3区に分割されたことや湧水による崩壊などのために、十分に把握できなかった。東辺の積土は周囲と識別し難く、輪郭が不明瞭で平面形にやや不安が残る。床面でピットを1基検出したが、主柱穴は確認できなかった。遺物は北東部と北西部、南東部の三箇所に集中しており、完形に復原できた土器も多い。



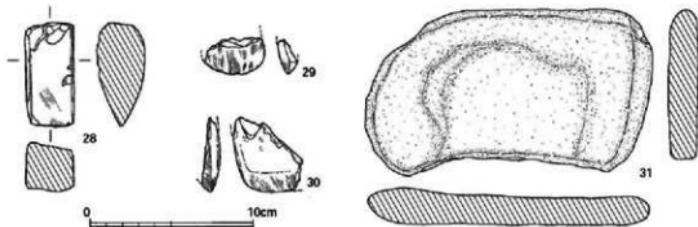
第7図 SC05実測図 (1/60)



第8図 SC05出土遺物実測図① (1/4)



第9図 SC05出土遺物実測図② (1/4)



第10図 SC05出土遺物実測図③ (1/3)

出土遺物（巻頭図版、第8～10図）

1～7は盤である。1は口縁部で、小片のため復原していないが口径34cmほどの大型品と思われる。外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。2は約1/4の残存で、復原口径17.2cm。やや小型の盤である。3は南東隅の集中部から出土した。口径24.6cm、残存高21.4cm。外面は口縁部がタテハケ、胴部はタテ・ナナメハケで口縁部にヨコナデを施す。内面は口縁部がヨコハケ、胴部はナナメハケである。外面には煤が付着している。4も南東隅出土で、口径22.8cm、器高31.8cmを測る。胴上半部は縱方向のハケメ、下半部は細いヘラ状工具による調整の痕跡が残る。内面は口縁部がヨコハケ、胴部はタテ・ナナメのハケが明瞭に残る。5は北東の集中部からの出土で、ほぼ床面直上である。口径20.0cm、器高26.9cmを測る。外面は口縁部・胴部ともにタテハケ、内面は口縁部がヨコハケ、胴部はタテハケである。外面には煤が付着している。6は北西部出土で、口径21.8cm、器高34.7cmを測る。胴部外面は横方向のタタキの後に縱方向のハケメ、下半部はヘラ状工具による調整である。内面は縱・斜め方向のハケメである。外面には一部煤が付着している。床面付近からの出土である。7はSC05中央部やや東寄りで出土した。口径19.2cm、器高29.6cmを測る。外面はタテハケで、胴下半部は粗いハケメかヘラ状工具による縱方向の調整痕が残る。8は外に広がる口縁にやや梯形の胴部で、他の土器とは胎土が異なる。頸部内面付近は凹凸が激しく、乱雑な仕上げである。口径15.0cm、器高25.2cm。全体的に器壁が摩滅しており調整がはっきりしない。

9～16は鉢である。9～11は丸底の鉢で、外面はハケとケズリ調整で、内面はヨコ・ナナメのハケメである。9は南東部の出土で、口径18.8cm。10は3区からの出土で、口径18.8cm、器高6.9cmを測る。11は南東部からの出土で、口径23.6cm、器高10.1cmとやや大型である。12は2区出土の鉢である。コイン状の底部をもつ。器形の歪みが著しい。14は南東隅から出土した完形の鉢である。口径13.9cm、器高9.0cmを測る。外面は横方向のナデで下半部はケズリ、内面は全面にヨコ・ナナメのハケメを施し、その後細いヘラ状工具で5本の平行線を残している。13・15・16は手捏ねの鉢で、内外面ともに指頭の痕跡が残る。13は南東隅からの出土で底部を欠く。口径10.8cm。15は北西部からの出土で完形品である。口径6.4cm、器高3.1cmを測る。歪みがあまりなく整った器形をしている。16は南東隅からの出土で、口縁を一部欠損する。歪みが著しい。

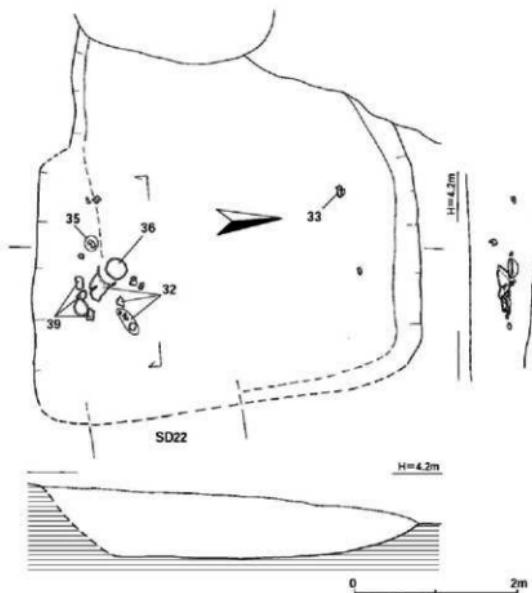
17は複合口縁壺の口縁部で、口唇部がやや外側に折れる。口縁の屈曲部が突出し、キザミを有する。内外面ともにタテハケのちヨコナデ調整である。18は扁平気味な胴部をもつ壺で、やや外反する直口縁である。復原口径は18.0cm、器高は15.1cmである。外面の調整は不明瞭であるが、内面はヨコハケが密に施されている。19は口縁部を欠くが、18と同様の器形と思われる。内面にはヨコハケを施すが、器面の凹凸が著しく乱雑な印象を受ける。20・21は小型の丸底壺である。20は北西

隅の検出面付近で出土した。ほぼ完形に復原でき、口径10.6cm、器高11.8cmを測る。外面はハケ調整の後にヘラで丁寧に研磨されている。口縁部内面もヘラミガキ、胴部内面は不明瞭であるがわずかに磨きの痕跡が認められる。底部には黒斑がついている。21は約1/2の残存で、復原口径11.2cm、器高12.1cmである。外面は胴上半部がタテハケ、中央部がヨコハケ、下半部はタテ・ナナメハケである。内面は口縁部がヨコハケ、胴部はナデで底部付近にハケメが残る。22は頸部がしまらずに口縁がひらく壺である。約1/2の残存であるが、口縁部の残りが悪く、傾きに不安が残る。復原口径16.0cm、器高10.2cmである。外面はタテハケ、内面は口縁部がヨコハケ、胴部はタテ・ナナメのハケ調整である。23・24は直口縁の丸底壺である。23は約2/3の残存で口径12.0cm、残存器高16.3cmである。外面はタテハケを施す。胴部中央付近には赤色顔料の付着と黒斑が認められる。内面は口縁部がヨコハケ、胴上半部はナデ、下半部はハケ調整が残る。24はほぼ完形に復原でき、口径13.9cm、器高28.5cmを測る。北東部付近から出土した。外面はヨコタタキの後にタテハケ、胴下部は細いヘラ状工具により仕上げられている。内面は口縁部がヨコハケのちヨコナデで、胴部はタテ・ナナメハケである。

25～27は高杯である。いずれも杯部中央に明瞭な段が残る。25は杯部のみの残存で、口径30.0cmである。外面はタテハケの痕跡がわずかに残り、内面は縱方向のヘラミガキを施す。中央部やや東寄りで出土した。床面付近の遺物である。26は南東隅からの出土で、口径29.5cm、器高19.9cmを測る。杯部の外面はナナメハケ、内面は縱方向のヘラミガキである。脚部外面はタテハケ、内面はナデである。裾部に黒斑が認められる。27は北東隅の床面直上から出土したもので、口径30.6cm、器高

22.7cmを測る。杯部外面は器壁の荒れのため調整不明瞭であるが、中央部の段にはタテハケが見られる。杯部内面はヘラミガキを施す。脚部外面はタテハケ、内面は裾部にナナメハケが残る。円形の穿孔が2ヶ所あるが180度対面の位置には配されていない。

28は粘板岩製の柱状片刃石斧である。長さ6.4cm、幅3.0cm、厚さ2.9cm。29・30は磨製石斧の刃部片で、29は安山岩製、30は頁岩製か。31は砂岩製の台石であろうか。28・31は中央やや東寄りから、29・30は3区内出土である。

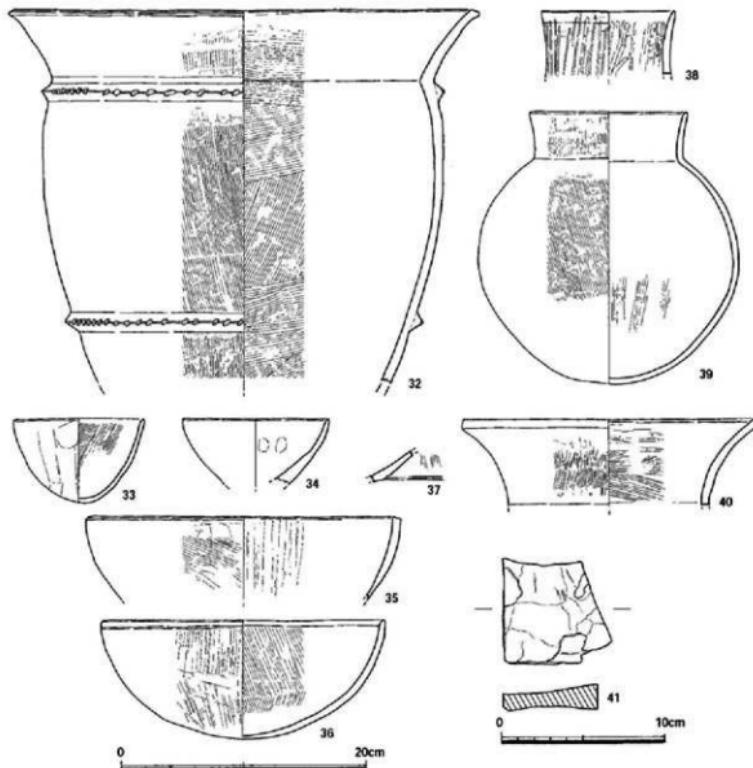


第11図 SC14実測図 (1/60)

SC14（第11図、図版2-3～5）

2区・4区にまたがって検出した。2区と3区、4区と5区の境目にちょうど住居址の東端が重なってしまい、平面形をおさえることができなかった。また、SC14はSD22と切り合い関係にあるが、4区部分が掘り終わるまで溝の存在に全く気づかず、5区着手後によろやくSC14付近から溝が延びていることに気付いた。そのためSC14の遺物とSD22の遺物が混じっている可能性が非常に高い。

SC14は西側をSE13とSX08に切られる。現存で南北4.6m、東西4m以上の長方形竪穴住居址で、深さは約70cmを測る。遺物の大部分はSD22の延長線上部分からの出土であるため、どちらに帰属するものか明確にできない。しかしSD22は第18次調査の古代の溝と一連のもので、本調査地点でもSC14の東端（4区・5区の境）から須恵器が出土している。この溝が古墳時代後期以降のものならば、弥生時代終末の土器はSC14のものか、あるいは溝掘削後に投棄されたものであろうか。



第12図 SC14出土遺物実測図 (1/4・1/3)

### 出土遺物（第12図）

32は大型の壺で、復原口径38.6cm、残存器高30.5cmである。頸部と胴部下半にキザミをもつ三角突帯がめぐる。外面はタテハケで、口縁部・突帯付近はヨコナデを施す。内面は口縁部から胴上半部がヨコハケ、胴中央部はタテハケ、下半部はヨコ・ナナメハケである。SK21出土の72と同一個体と思われる。33～36は鉢である。33はほぼ完形で口径8.8cm、器高6.8cmを測る。外面はケズリ、内面はタテハケを施す。34は復原口径12.0cmで、内外面ともにナデ調整。内面に指頭圧痕が残る。35は大型の鉢である。約1/4の残存で復原口径26cm。外面はナナメハケとヘラミガキ。内面は縱方向のヘラミガキである。36も大型の丸底鉢で完形品である。口径23.2cm、器高9.7cm。外面はヘラ状工具で縱方向にナデ、内面はタテハケを施す。37は高杯の杯部片である。外面はタテハケ、内面はナデ調整。38・39は直口壺である。38は約1/3の残存で、復原口径11.0cm、内外面ともに縱方向のヘラミガキを施す。39はほぼ完形で、口縁部の一部を図上復元した。復原口径13.0cm、器高22.1cmを測る。直立する口縁に球形の胴部をもつ。外面はタテハケ、内面は丁寧なナデを施す。40は広口壺の口縁である。小片

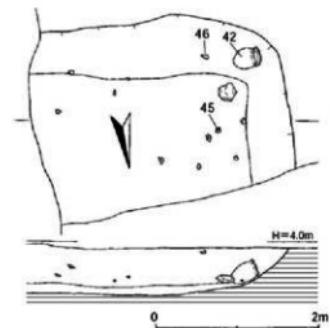
のため径と傾きに不安が残るが、復原口径24.4cmである。外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。41は砂岩製の砥石である。両面を使用している。

### SC23（第13図、図版2-6、3-1）

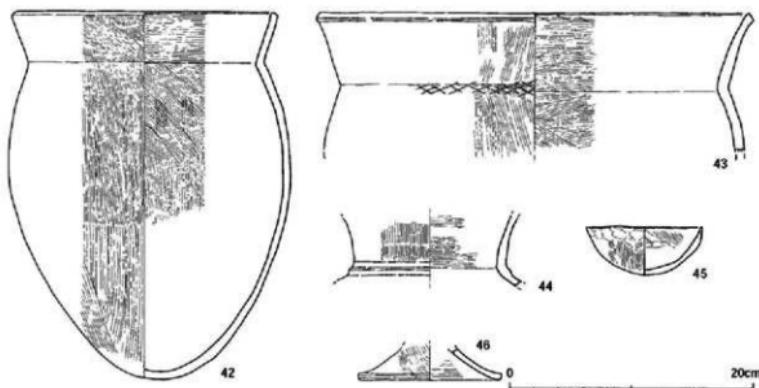
5区で検出した。北側をSD22に切られるが、平面・土層断面ともに明瞭には識別できない。東側はSX01に切られる。現存で南北2.6m、東西3.3mの方形堅穴住居址で、残存壁高は60cmである。床面を精査したがピットは検出できず、主柱穴は確認できなかった。

### 出土遺物（第14図）

42はほぼ完形の壺で、口径21.7cm、器高30.0cmを測る。外面は口縁部がタテハケのちナナメハケ、



第13図 SC23実測図 (1/60)



第14図 SC23出土遺物実測図 (1/4)

胸部がタテハケである。胸下部は粗いハケメを施す。内面は口縁部がヨコハケ、胸部がタテ・ナナメのハケメである。胸部外面には煤が多く付着している。43は大型の壺の口縁部片で、SK19出土の64と同一個体と思われる。復原口径25.8cm。外面はタテハケ後に頸部に斜格子状のキザミを施す。内面調整は口縁部・頸部ともにヨコハケである。胎土に角閃石を含む。44は壺の頸部である。約1/4の残存で頸部の復原径は12.6cmである。

頸部には三角突帯がめぐる。外面調整はタテハケ、内面はヨコハケを施す。45は小型の鉢で、2/3の残存である。口径9.5cm、器高3.9cm。外面はタテハケ、内面はハケの後にナデしている。内外面ともに口縁部には指頭の痕跡が残る。46は脚付鉢の脚部である。約1/4の残存で幅部の復原径は11.8cm。外面調整はタテハケのちヨコナデ、内面はヨコハケである。

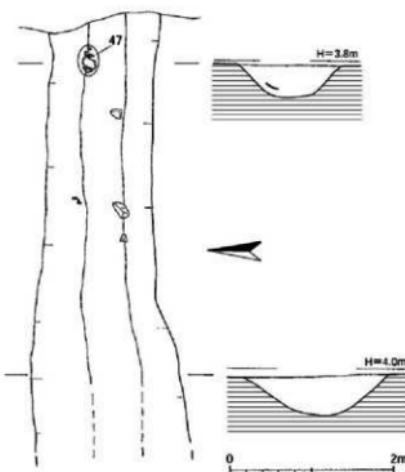
#### ②溝 (SD)

##### SD22 (第15図、図版3-2)

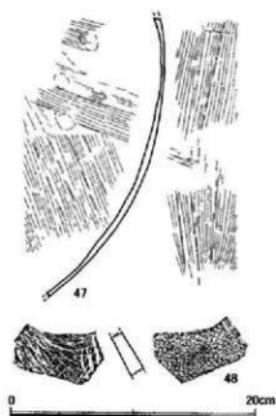
4区・5区で検出した。SC14とSC23を切り、東側はSX01に切られる。第18次調査のSD23・41と一連の溝である。幅140~180cm、深さはおよそ50cm。他の遺構の覆土との識別が困難で、溝の方向・幅・深さに不安が残る。西側はSC14内で終わるのか、あるいは2区まで延びてSE13に切られているのか不明である。遺物の出土は少量であることから、4区のSC14と重なる部分の遺物はSD22のものではない可能性が高い。また、5区部分で底付近から弥生終末の壺胴部(47)を検出しが、これはSD22に伴うものか判然としない。溝の底に気付かず掘り過ぎてSC23の遺物を掘り出してしまったものか、あるいは溝掘削後に弥生土器を廃棄した可能性もある。須恵器片の出土があることから、第18次調査と同じく古代の溝と思われる。検出面付近では鉄滓が出土している。

##### 出土遺物 (第16図)

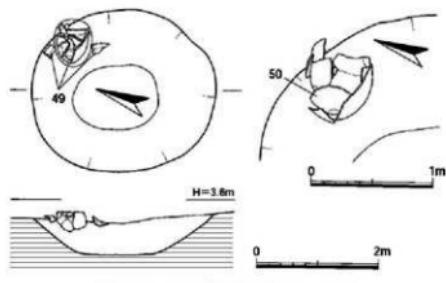
47は壺胴部片である。弥生終末のもので、上述したようにSD22に伴うものは不明である。内外面ともにハケ調整である。外面には煤が付着している。48は須恵器の壺胴部片である。4区と5区の境付近から出土した。外面にはタタキ、内面には当て具痕が残る。



第15図 SD22実測図 (1/60)



第16図 SD22出土遺物実測図 (1/4)



第17図 SK02実測図 (1/40・1/20)

### ③土坑(SK)

#### SK02 (第17図、図版3-3-5)

1区北東部で検出した。中央付近は黒褐色砂で埋まり明瞭であるが、縁辺部は地山の砂とほとんど区別がつかない。当初は黒褐色砂部分が遺構と思い掘り始めたが、黄白色砂内から49が見えたことでSK02が広がることに気付いた。長軸1.5m、短軸1.3mの楕円形のプランで、深さは30cmである。遺物は検出面に集中していた。上面に甕(49)の胴部の半分が横たえており、それをとりあげると底部付近に完形の鉢(50)が伏せた状態であらわされた。その下には49の残りの胴部が横たわるという廃棄状況であった。

#### 出土遺物 (第18図)

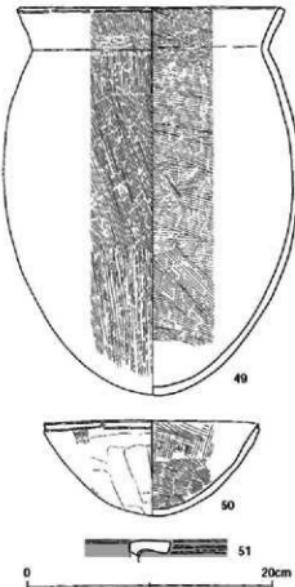
49はほぼ完形に復原できた甕で、口径21.9cm、器高31.7cmを測る。外面調整はタテハケ、胴下半部は細いヘラ状工具で仕上げている。内面はヨコ・ナナメハケを施す。外面には黒斑が認められる。50は完形の鉢で、口径17.6cm、器高7.8cmである。上述のように49の胴部に挟まれた状況で出土した。外面はタテハケのちケズリ、内面は不定方向のハケ調整である。器形の歪みが著しい。51は弥生中期後半の甕口縁部片である。丹塗りを施す。

#### SK12 (第19図、図版3-6)

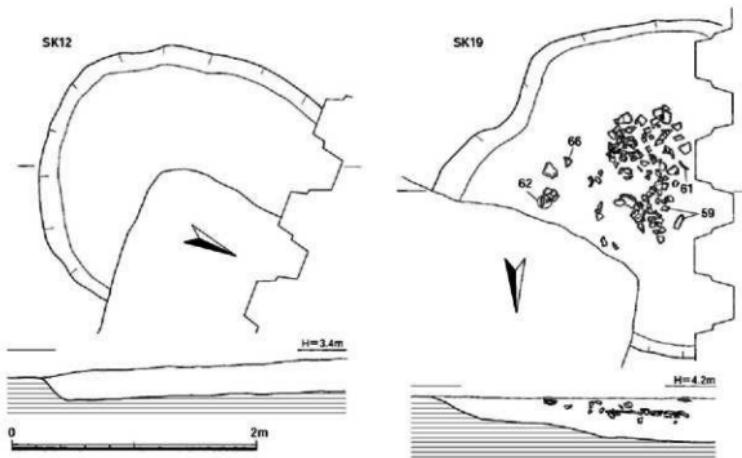
1区北壁沿いで検出した。覆土は明瞭な黒褐色砂ではなく汚れた黄褐色砂で、検出面での識別が困難で全体に少し下げたところで確認した。現存で東西2.4m、南北2.1mの隅丸方形で、深さは約20cmである。表土剥ぎの際に深掘りした部分から土器片を大量に採集したが、これらはSK12に伴うものと思われる所以ここで報告する。SK12の北東部を切るトレンチがその深掘り部分である。甕・壺・鉢が出土した。なお、人力掘削の際には遺物は出土しなかった。

#### 出土遺物 (第20図)

52・53は甕である。ともに約2/3の残存である。52は口径16.8cm、器高22.5cmを測る。外面は口縁部がヨコハケ、頸部から下はタテハケ、胴下半部はケズリを施す。内面調整は口縁部がヨコハケ、胴部はナナメハケである。53は復原口径22.4cm、器高33.2cmである。全体に歪みがあり復原に不安が残る。胴部を1/2欠損する。外面はタテハケ、胴下半部は細いヘラ状工具で仕上げる。頸部にはハケ調整の際の段が明瞭に残る。内面は全面にヨコ・ナナメハケを施す。54は直口甕である。球形の



第18図 SK02出土遺物実測図 (1/4)



第19図 SK12・19実測図 (1/40)

胸部にやや外反する口縁をもつ。約1/3の残存で、復原口径14.6cm、器高21.0cmを測る。外面はタテ・ナナメのハケ調整、内面は不整方向のハケである。55～57は鉢である。55は胸部の一部を欠く。口径15.7cm、器高6.5cmである。外面調整はナデ、内面はヨコハケ、下半部はナデを施す。56は約1/2の残存で、口径17.0cmである。外面はケズリ、内面はハケ調整である。57は大型で半球形の鉢である。約1/2の残存で、復原口径19.2cm、器高11.5cmを測る。外面上半は粗いハケ、下半はケズリである。内面は全面にハケを施す。

#### SK18 (第21図)

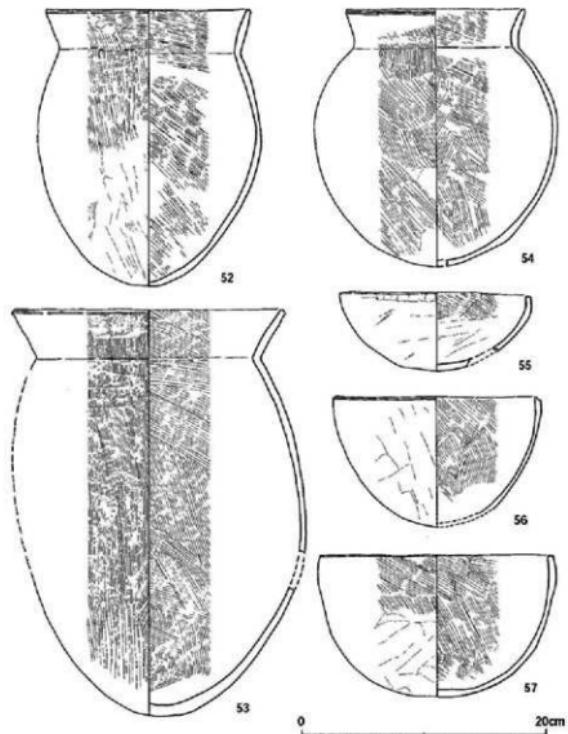
3区・5区にまたがって検出した。南北1.8m、東西最大1mの不整形で、深さは30cmを測る。覆土は薄い褐色砂で、明瞭な遺構覆土ではない。遺構ではなく汚染された砂の可能性もある。出土遺物は土器小片1点のみである。

#### SK19 (第19図、図版4-1～3)

4区西壁沿いで検出した。西側は調査区外に延びる。現存で東西2.5m、南北2.8mの不整形で、深さは約30cmを測る。表土剥ぎの時点では土器が多く見られ、検出面から15cmほど間に多量に包含されていた。土器はいずれも破片であったが、接合するものが多い。他の遺構に比べて壺の比率が高いように思われる。

#### 出土遺物 (第22図)

58～65は壺である。58は口縁部片で、外面はタタキの後にタテハケ、内面はヨコハケを施す。復原口径22.0cm。59は胸部以下を欠く。復原口径25.0cm。外面はタテハケ、口縁端部と頸部はヨコナデを施す。内面は口縁部がヨコハケ、胸部がヨコ・ナナメハケである。他の土器に比べてやや器壁が薄い。60は底部を欠き、約1/3の残存である。器形の歪みが著しい。口径24.0cm、残存高28.9cmである。外面は横方向のタタキの後にタテハケを施し、脚下部は細いヘラ状工具でケズリ状に仕上げる。内面は口縁部がヨコハケ、胸部がタテハケである。口縁外面にわずかに赤色顔料が付着している。61・62はともに口縁部から胸上半部の残存で、復原口径は61が21.0cm、62が23.0cmである。とも



第20図 SK12出土遺物実測図 (1/4)

タテハケ、内面はナナメハケを施す。66は丸底の鉢である。底部を欠く。口径18.0cm。全体的に調整が不明瞭であるが、外面底部付近にハケメがわずかに残る。67は高杯の脚部である。裾部の復原径は14.4cmである。外面はタテハケ、内面は裾部にヨコハケを施す。

#### SK20 (第21図、図版4-4)

4区・5区にまたがって検出した。南側は調査区外に延びる。現存で東西2.7m、南北1.5mの円形で、深さは20cmである。底は縄文土器包含層にまで達していた。

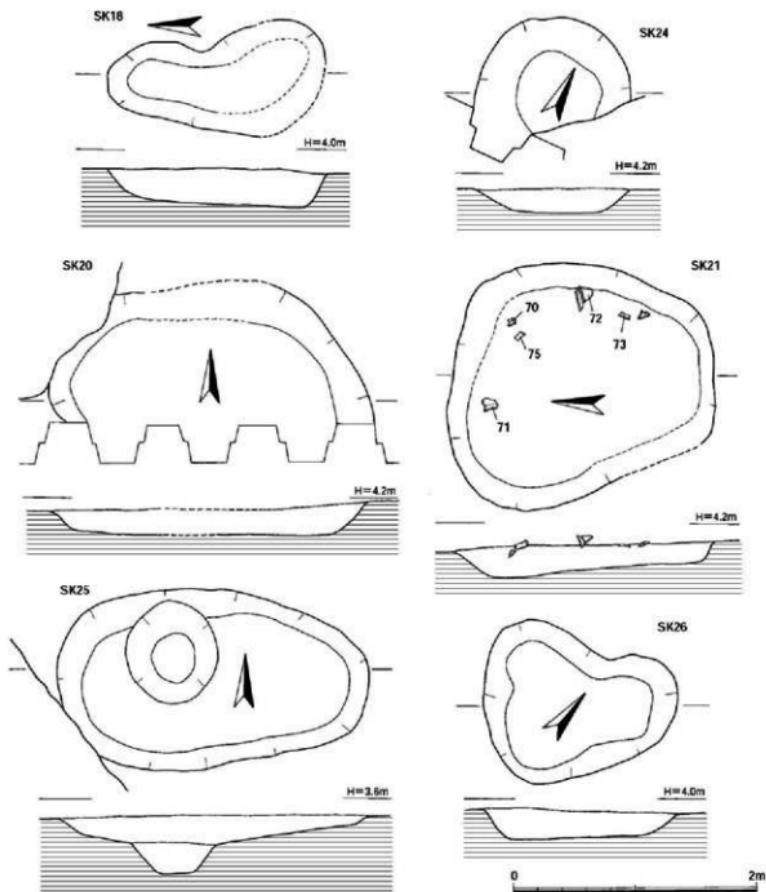
#### 出土遺物 (第23図)

68は甕の口縁部片で、端部をわずかにつまみ上げる。摩滅のため調整不明である。69は高杯杯部片である。杯部の段がわずかに残る。内外面ともに丁寧に研磨されている。

#### SK21 (第21図、図版4-5)

4区・5区にまたがって検出した。東西2m、南北2.2mの不整形で、深さは約20cmである。覆土は明瞭な黒褐色砂で、検出面付近で土器が数点出土した。甕・高杯・鉢のほか、弥生中期の壺も含まれていた。

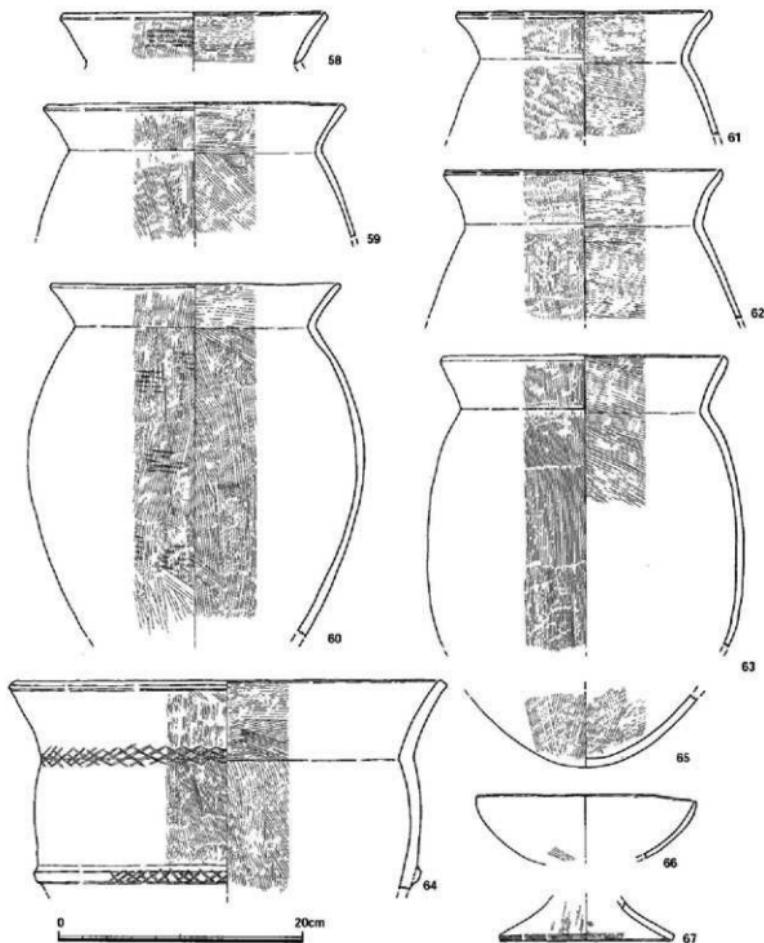
に外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。63は胸部の3/4と底部を欠く。口径は23.8cm、残存器高は23.8cmである。外面はタテハケで、口縁部はタテハケ後にヨコナデ、胴下半部はやや粗いハケメである。内面はヨコ・ナナメハケを施す。64は大型の甕で、復原口径36.0cm、残存器高17.2cmを割る。SC14出土小片と接合した。SC23出土の43と同一個体と思われる。頸部に斜格子状のキザミを施し、胴部には×印を刻んだ低い台形突帯を貼り付けている。胎土は赤橙色で、他の土器とは異なる。外面はタテハケ、内面は口縁部がヨコハケ、胸部がタテハケである。65は甕の底部でやや尖底状の丸底である。外面は



第21図 SK18・20・21・24・25・26実測図 (1/40)

#### 出土遺物（第23図）

70は弥生中期後半の鈍先口縁の壺である。復原口径31.6cm。丹塗りを施す。71～73は壺である。71は約1/6の残存で、復原口径は26.6cm。外面調整はタテハケ、内面は口縁部がヨコハケ、胸部がナメハケである。72は頸部にキザミを有する三角突帯がめぐる。SC14出土の32と同一個体と思われる。外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。73は約1/3の残存で、復原口径は18.0cm。小型の壺である。外面調整はタテハケ、内面はヨコハケ。74は手捏ねの鉢である。約3/4の残存で、口径は6.9cm。器形の歪みが著しい。内外面に指頭の痕跡が残る。75は高杯脚部である。外面はタテハケ、内面にはシボリ痕が見られる。



第22図 SK19出土遺物実測図 (1/4)

**SK24 (第21図)**

5区の南端で検出した。東側はSX01に切られる。径1.3mの円形プランで深さ20cm。出土遺物は上器小片1点のみである。

**SK25 (第21図)**

2区で検出した。長軸2.6m、短軸1.5mの長楕円形で、深さ20cmを測る。南西隅はSX08に切られ

る。中央付近には径90cm、深さ30cmの窪みがある。遺物は出土していない。

#### SX26 (第21図)

3区・5区にまたがって検出した。長軸1.6m、短軸1.3mの不整形で、深さは約20cm。SK18と同じく、明瞭な遺構覆土ではない。遺物は出土していない。

#### ④その他の遺構・遺物

##### SX01

1区・3区・5区の東壁沿いに広がる落ち込みである。覆土は赤褐色砂である。当初は細い溝状の遺構かと思われたが、5区では西に広がり、幅2m以上になる。深さは20~50cmで、南の方は底が平坦な面をなす。東隣の第18次調査でも西壁付近に赤褐色砂が見られたようである。大規模な擾乱であろうか。土器小片がわずかに出土する程度で時期・機能は不明である。

##### SX08

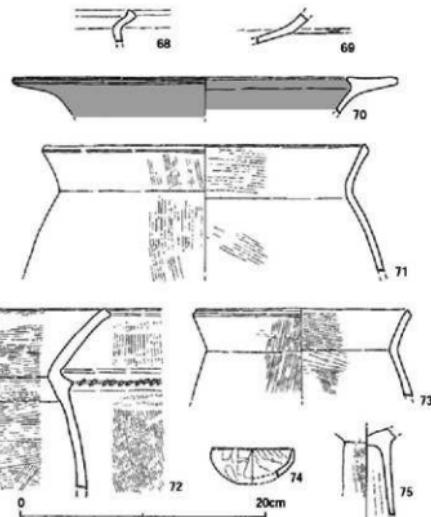
1区・2区の西壁沿いに広がる大きな落ち込みである。覆土は白色砂と黒褐色砂の互層で、深さは1m以上である。湧水のため底は確認できなかった。SX01と同じく大きな擾乱であろうか。壢り鉢、瓦片、土師器、陶磁器などが出土している。近世以降のものか。

#### 出土遺物（第24図）

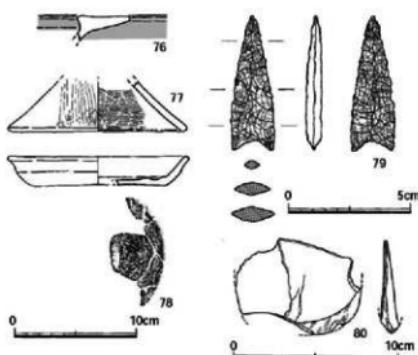
78は土師器杯で、SC14との境界付近から出土した。約1/3の残存で復原口径14.8cmである。底部には糸切りの痕跡が残る。

#### 検出時の遺物（第24図）

76は鋤先口縁の壺である。5区で出土した。SK21出土の70と同一個体であろうか。77は脚付鉢の脚部か。3区出土である。約1/2の残存で、裾部径は14.6cmである。外面調整はタテハケの後にヘラミガキで、内面は丁寧なヨコハケである。79は黒曜石製石鎌である。凹基無茎式で、長さ5.5cmの大型品である。4区検出時の出土で、遺構に伴うものではない。完形品で、幅1.8cm、厚さ0.6cmである。80は磨製石斧の刃部片である。表面・裏面ともに剥離して欠損している。砂岩製か。



第23図 SK20・21出土遺物実測図 (1/4)



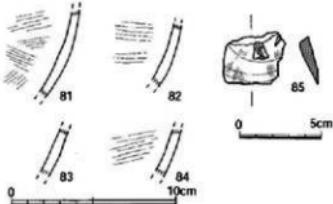
第24図 その他の遺物実測図 (1/4・1/2・1/3)

##### ⑤縄文時代包含層の調査(図版4-6)

4区・5区の南半部で検出した。調査区南端の最も浅いところで黄白色砂から-40cmで確認される。標高は約3.8m。赤みがかる黄褐色砂である。第6図の土層図に示すように南から北に向かって下がっていく。包含層の厚さは20cmほどで、その下は粘性のある赤みがかった褐色砂で、堅くしまる。4区はSC14南側付近まで包含層を追いかけたが、それ以上は湧水のため確認できなかった。5区は西半と東半に分けて掘り進め、それぞれSD22付近まで赤褐色砂を確認した。出土遺物は少なく、土器片約30点と黒曜石片1点のみである。条痕の残るもののが数点ある程度で、文様が施されたものはない。

##### 出土遺物(第25図)

条痕の残るもの、ある程度の大きさのものを図示した。B1・B2・B4は条痕の残る土器片である。いずれも小片のため傾きに不安が残る。B5は使用痕のある黒曜石片である。



第25図 縄文時代遺物実測図(1/3 · 2/3)

## 第4章 まとめ

今回の調査では、周辺調査と同じく弥生時代終末から古墳時代前期の集落を確認した。その他に古墳時代後期から古代と思われる溝、縄文土器包含層などを検出した。また、調査期間終盤に西南学院大学の磯先生立会いのもと重機で深掘りを実施したところ、縄文土器が出土した赤色砂の下からAso-4火山灰と思われるものが確認され、地質学的観点から新たな知見を得ることができた。ここでは以下の3点について述べ、まとめとしたい。

### (1) 弥生時代終末～古墳時代前期の遺構

検出した主な遺構は竪穴住居址3軒、土坑8基である。ほとんどの遺構はこの時期のものと思われる。この中では、大量の土器が出土したSC05が注目される。30点以上の土器が投棄されており、住居址の遺存状況も良好であった。久住猛雄氏の編年(注)のⅠB～ⅡA期か。本地点の特徴として外来系土器がみられないことが挙げられる。多量の土器が出土したが、いずれも在来系であった。また、西新町遺跡に特徴的な漁撈関連遺物も出土していない。本地点は西新町遺跡の中でも様相がやや異なるようである。

### (2) 弥生時代中期の葬棺

周辺の第7・10・18次地点ではいずれも葬棺が検出されており、本地点まで墓域が広がるのかが課題の一つであったが、本地点では葬棺は確認されなかった。よって葬棺墓の分布範囲は第2・7・10・18次地点を列状に伸び、第18次地点の北端部でおさまることが判明した。

### (3) 縄文時代包含層

東の第18次地点で確認された縄文時代包含層を本地点でも検出したが、遺物の出土は極端に少なかった。第18次地点は南西部での出土が多かったようであるが、本地点での出土量が非常に少ないとから、分布はあまり西へは広がらないようである。南側への広がりを今後の調査で明らかにする必要があろう。

(注) 久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX

# 図 版





1. 1区北東部全景（南から）



2. 1区全景（西から）



3. 2区全景（北から）



4. 3区全景（南から）



5. 4区全景（北から）



6. 5区全景（北から）

図版2



1. SC05 1区（北から）



2. SC05 3区（南から）



3. SCI4 2区（北西から）



4. SCI4 4区（北から）



5. SCI4 4区遺物出土状況（北から）



6. SC23（北から）



1. SC23遺物出土状況（北から）



2. SD22（西から）



3. SK02（南西から）



4. SK02遺物出土状況（北から）



5. SK02完掘状況（南西から）



6. SK12（南東から）

図版4



1. SK19(南から)



2. SK19遺物出土状況(東から)



3. SK19完掘状況(南から)



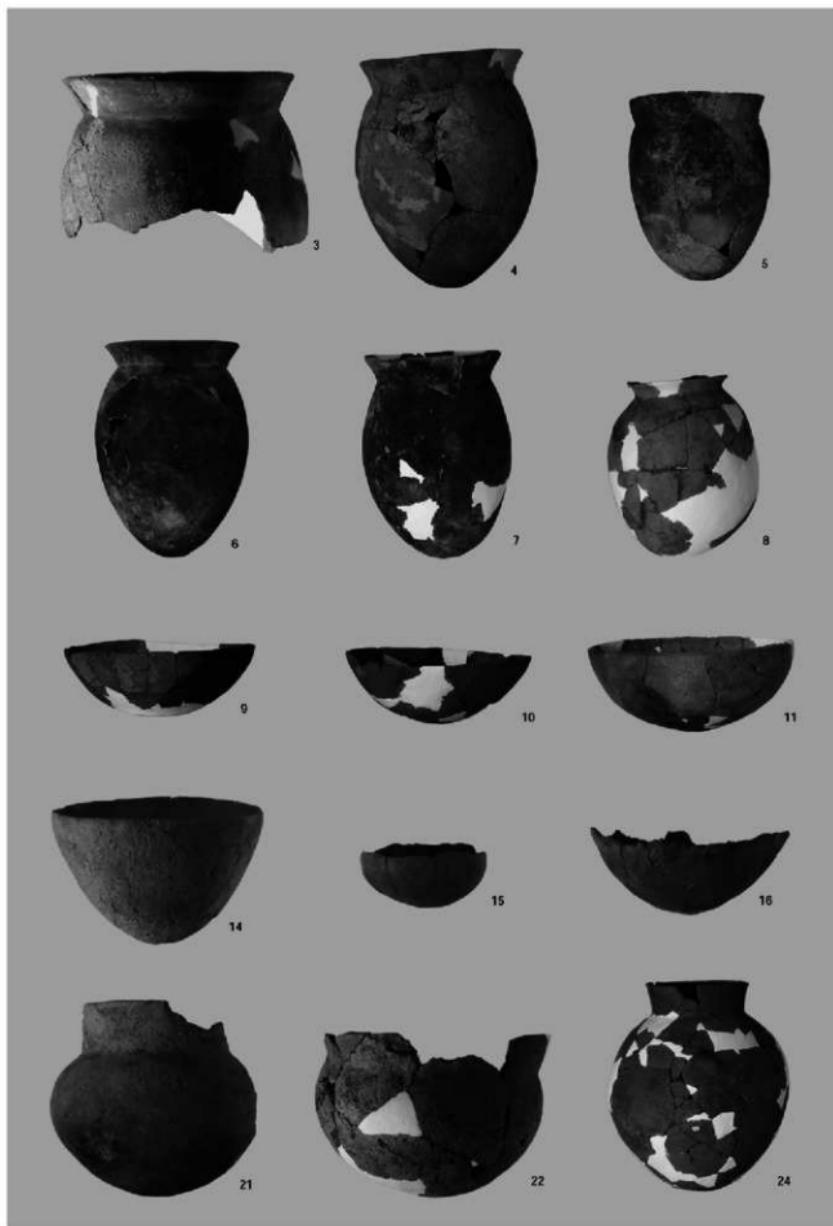
4. SK20(北西から)



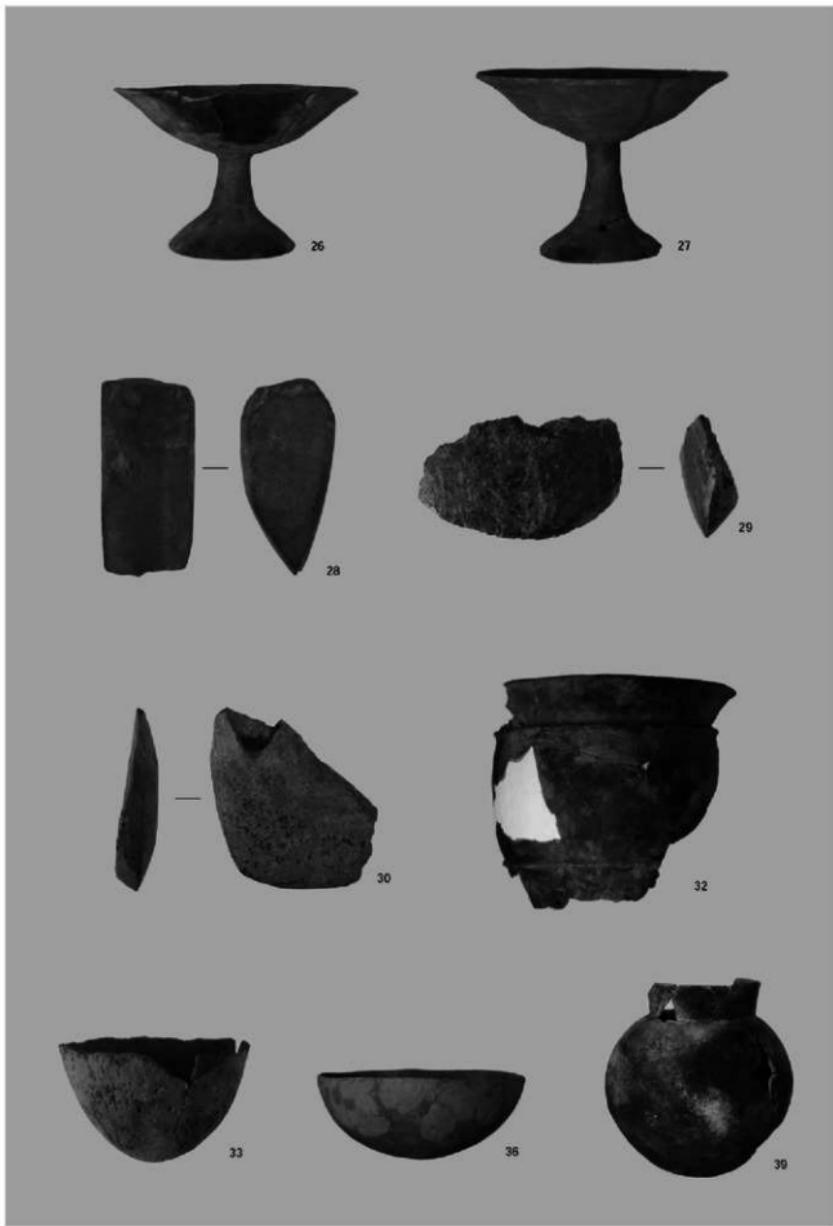
5. SK21(南から)



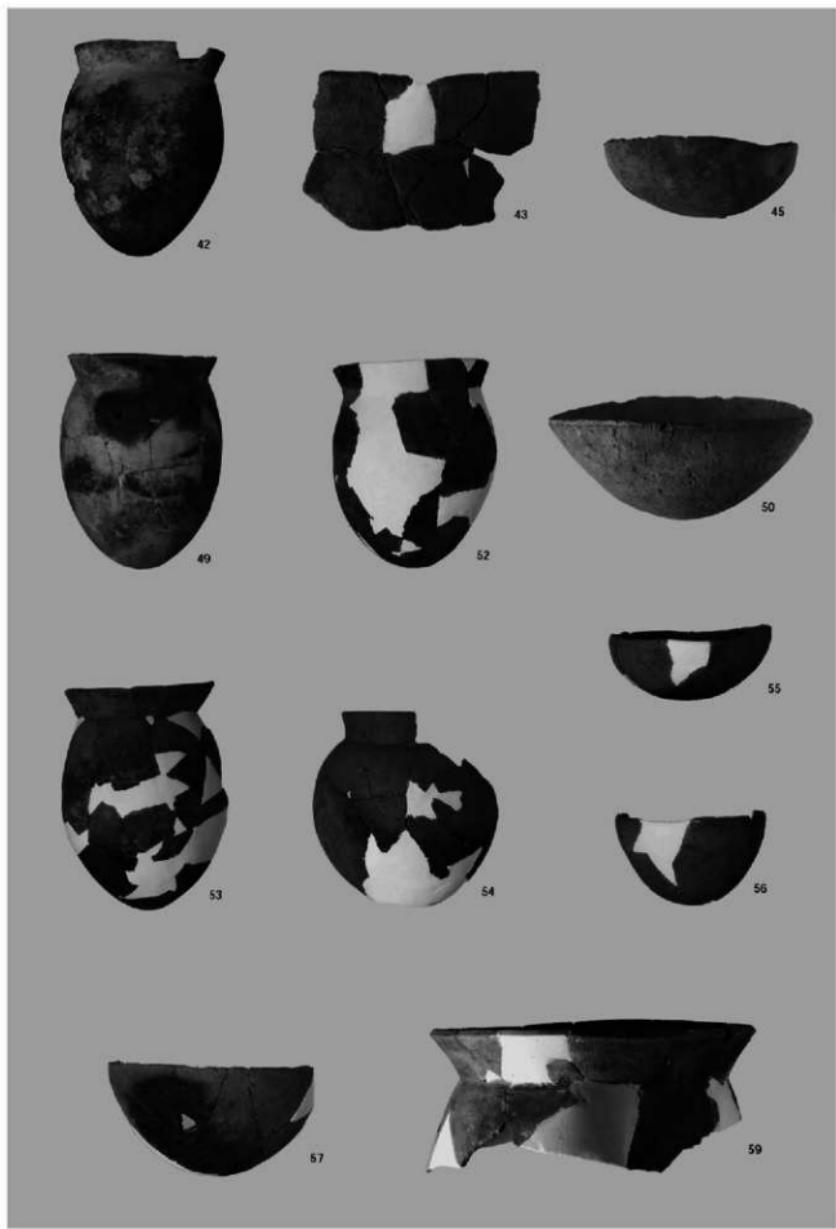
6. 4区縄文時代遺物出土状況(北から)



出土遺物 I (縮尺不同)

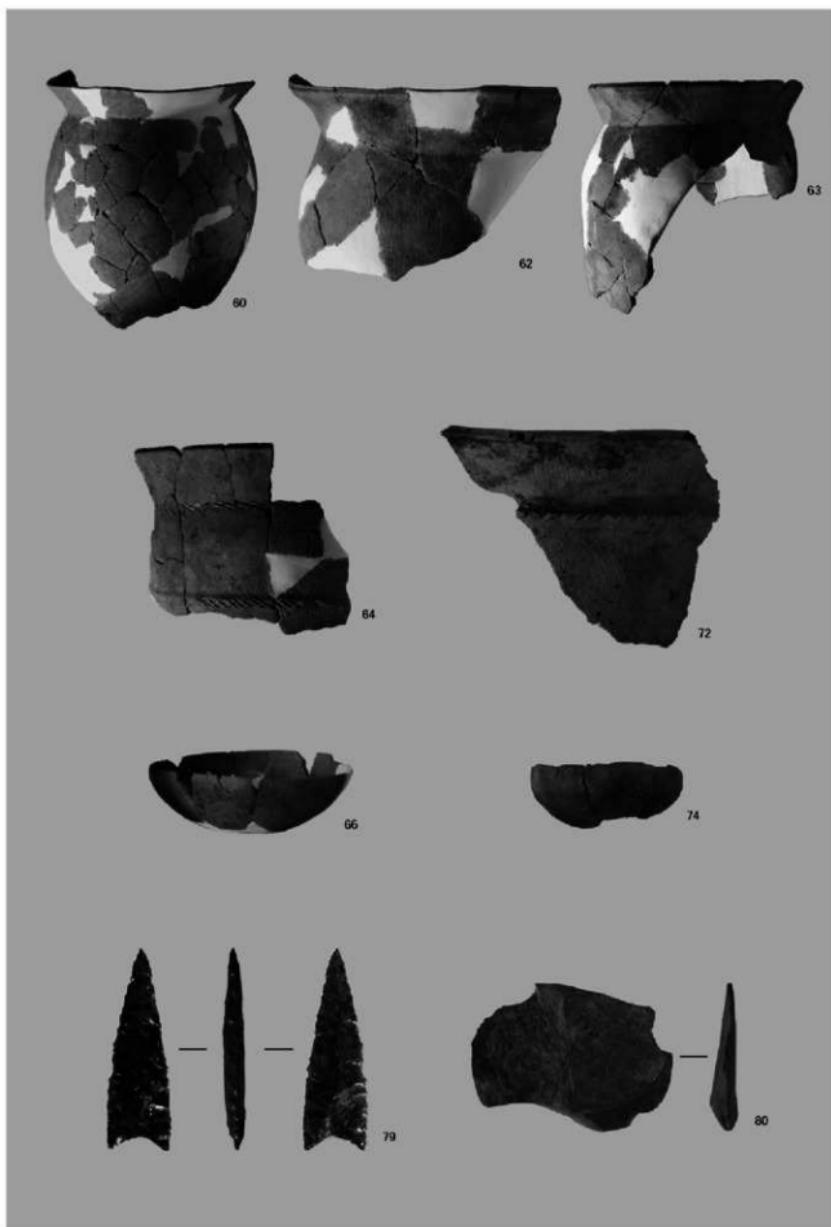


出土遺物 II (縮尺不同)



出土遺物III（縮尺不同）

図版8



出土遺物IV (縮尺不同)

## 報告書抄録

ふりがな	にしじんまちいせき11					
書名	西新町遺跡11					
副書名	第21次調査報告					
巻次						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第985集					
編著者名	今井隆博					
編集機関	福岡市教育委員会					
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1					
発行年月日	2008年3月17日					
調査期間	2006年9月6日～2006年12月5日					
調査面積	369.49m <sup>2</sup>					
調査原因	共同住宅建設					
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			
西新町遺跡 第21次	福岡県福岡市早良区 西新5丁目572-2	40137	0240	33°34'55"	130°21'19"	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項	
西新町遺跡 第21次	集落	縄文 弥生 古墳 近世	竪穴住居址 溝 井戸 土坑	3 1 2 8	縄文土器 弥生土器 石器 須恵器 近世窯道具	弥生時代終末期の集落を検出。 住居址からは多量の土器が出土。 さらに下層からは縄文土器包含層を確認した。

## 西新町遺跡11

—第21次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第985集

2008年（平成20年）3月17日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

(092) 711-4667

印刷 (株)大里印刷センター

福岡市東区二又瀬新町12-29

(092) 611-3118